

ハンドボールにおけるバックコートプレイヤーの フェイントを用いた1対1の突破プレーに関する研究

加須屋 朝緋 (200911930、ハンドボール方法論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード： 学生レベル、世界レベル、記述的ゲームパフォーマンス分析

【目的】

ハンドボールにおいて攻撃活動の最大の目的は得点することである。フェイントを用いた1対1の突破プレーは、防御ラインを突破するための有効な個人技術である。本研究では、バックコートでのフェイントを用いた1対1の突破プレーの特徴を明らかにするために、記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて、学生、世界の競技レベルで行われているプレーを比較し、自身の今後の競技生活や指導の一助とする。

【方法】

学生レベルの分析では 2012 年関東学生女子秋季リーグ 116 場面を、世界レベルの分析では 2012 年ロンドンオリンピック 121 場面を研究対象とした。分析項目は、プレー場面、ポジション、ボールキャッチの方向、ボールキャッチ時の足、間合い、歩数、ステップ、腕の使い方、ドリブルの有無、抜く方向、プレー結果である。

【結果と考察】

本研究の結果以下の7点が明らかになった。

(1) プレー場面、キャッチ方向、キャッチ足、間合いにおいて、学生と世界との間で差はなく、プレー結果との関連性もない。

(2) 学生は右バックでフェイントを行うとフリースローよりパスが多い。

(3) 学生と世界ともに2歩でのフェイントが有効なプレー（シュート達成、アシストパス、7mスローの獲得、相手選手の反則プレーによるイエローカードまたは退場）になる。3歩でのフェイントの場合、学生は有効なプレーよりパスが多く、世界は有効なプレーよりフリースローが多くなる。

(4) 学生はストライドステップが多く、ストライドステップとプレー結果との間に関連性はない。世界は両足ステップが多く、両足ステップの時にはフリースローになることが多い。

(5) フェイント中の腕の使い方において、学生はパスフェイクを、世界は回旋を使うことが多い。また、学生は腕を使わないでフェイントし

た場合、パスをすることが多いのに対し、世界ではいずれの腕の使い方を行っても、プレー結果との間に関連性はない。

(6) 学生と世界いずれにおいても40%以上はドリブルを使わないでフェイントしている。学生に比べ、世界はフェイント前にドリブルをすることが多い。しかし、ドリブルとプレー結果との間に関連性はない。

(7) 学生と世界いずれにおいてもフェイントを用いた1対1の突破プレーは約45%が有効なプレー（シュート達成、アシストパス、7mスローの獲得、相手選手の反則プレーによるイエローカードまたは退場）になる（表1）。有効なプレーにならなかった場合、学生はパスが多く、世界はフリースローが多い。

表1 プレー結果と競技レベルとの関係

	学生	世界	合計
有効	53(45.7%)	57(47.1%)	110(46.4%)
フリースロー	19(16.4%) [△]	43(35.5%)*	62(26.2%)
パス	44(37.9%)*	21(17.4%) [△]	65(27.4%)
合計	116(100%)	121(100%)	237(100%)

カイ2乗値=17.477、 $p<0.05$

*: 残差分析の結果有意に多い

△: 残差分析の結果有意に少ない

【結論】

一般にフェイント前のドリブルは避けるべきだと言われるが、本研究ではドリブルの使い方とプレー結果との間には関連性がないことが明らかになった。また、目の前の1対1を攻める時には、世界のプレーは最終的にパスをするのではなく、フリースローで中断されることが多いことから、目の前の1対1を最後まで強く攻めきろうと意図していることが窺える。学生においても、特に右バックでのフェイントでこのことが重要であると提言できる。さらに、フェイントは2歩が良いこと、均衡打破のためのフェイントプレーは約45%が有効であることが明らかになった。